

昭和天皇と炭鉱労働者

—戦後初期炭鉱「巡幸」の検討—

藤 野 豊

はじめに

昭和天皇裕仁は、いわゆる「人間宣言」を発した直後の1946年2月、神奈川県を手始めに全国の「巡幸」（以下、「」を付けず単に巡幸と記す）を開始した。それは1947年5月に日本国憲法が施行され、天皇が憲法上の「象徴天皇」と位置付けられた後も続けられ、1954年8月、北海道巡幸をもって完結する。アメリカの直接占領下にあった沖縄を除き、天皇は全国すべての都道府県を巡幸した。

ジョン・ダワーは、「保守派エリートはGHQと協働し、天皇を「人間」へと変身させるために大々的な宣伝活動に乗り出した。彼らは、天皇は全国を巡って、文字通り臣民と同じレベルに降り立ち、貧しく、空腹を抱え、悲惨な境遇にある人々と親しく交わるべきだと考えていた」と巡幸の目的を指摘し、不平も言わず淡々と巡幸をこなす天皇の姿は、「国民の苦しみシンボル」になるという予期しない結果をもたらしたと述べている。⁽¹⁾ 巡幸は日本政界の保守派とGHQとの合意による「人間天皇」を国民に印象付ける演出であったという趣旨の叙述は、それまでの研究史から見ても妥当なものと考えられる。⁽²⁾

ただ、わたくしは、1975年に鈴木しづ子が指摘したものの、その後の研究では深められていない課題が残されていることに注目したい。それは天皇の巡幸が労資協調的ムード作りに一役買っていたという事実の解明である。巡幸先で天皇は単に「人間天皇」を演出するため、戦災を受けた国民を慰め、復興に向けて励まただけではなく、労働運動から階級闘争的性格を排除しようとする極めて政治的な発言を繰り返していたのではないかと鈴木は問題提起していたが、これを検証する作業は未だなされていない。鈴木の問題提起には、「象徴天皇制」にGHQと日本政府から課された政治的役割があったことが示唆されている。⁽³⁾ わたくしは、30数年前になされた鈴木の問題提起にいささかでも答えるため、このささやかな一文を記す。鈴木の問題提起の実証、それが小稿の課題である。

この課題のため、小稿では1949年の九州巡幸時を中心に、天皇の炭鉱巡幸に焦点を当てる。炭鉱巡幸については、すでに吉見義明が経済復興に向けた増産奨励の事例として紹介しているが、⁽⁴⁾ 小稿では、天皇が炭鉱巡幸を強く希望した意図、そして巡幸が増産奨励だけに止まらず炭鉱労働者に与えた政治的影響について詳細に検討していく。

周知のごとく、天皇の全国巡幸がおこなわれた1947年～1954年は、炭鉱をめぐる国策

は激変している。すなわち、当初、傾斜生産方式の下で重要産業と位置付けられ優遇された石炭産業は、経済安定9原則により傾斜生産方式が終了させられると、ドッジラインの下で不況に襲われ、石炭はそれまでの増産体制による供給過剰で価格下落を引き起こし、一旦は朝鮮特需で景気を復活させたものの、石炭から石油へのエネルギー転換という国策が徐々に進行するなか、再び展望のない不況に追い込まれ、中小炭鉱は次々と閉山に追い込まれていく。当然、炭鉱労働者の生活は国策により翻弄され、炭鉱の労働運動は拡大し、争議は激化する。天皇はそうした状況下の炭鉱を巡ったのである。そこでは、GHQや日本政府の意向に沿い行動する天皇の姿が鮮明となる。小稿において、炭鉱巡幸を通して天皇が労働争議の鎮静化という役割を演じた事実を明らかにして、象徴天皇制がその成立当初に課された政治的目的を明らかにしていきたい。

なお、小稿では地方新聞の記事を多く引用したが、その理由について一言説明しておく。すでに、地方新聞の巡幸報道を重視し、社説や記者の感想記事を分析した瀬畑源は、地方新聞には共通する「人間宣言」や日本国憲法第1条を論拠にした報道方針があったと指摘、巡幸報道を通して地方新聞が「民主化」の「啓蒙の担い手」であったと述べており、⁽⁵⁾ わたくしも瀬畑のこの指摘を重視する。そして、さらに次のような事実にも注目する。すなわち、それは、1949年の九州巡幸に際して、取材した『佐賀新聞』の記者が、記者やカメラマンが天皇を取り囲んでしまい、「一般歡迎者から「新聞記者見えないぞ」「報道員腰を下せ」と大ぶん声がかかった」と述懐している事実である。⁽⁶⁾ 「人間天皇」となり、記者やカメラマンは天皇周辺に群がるようにして取材した。そうであるとすれば、新聞報道に紹介された天皇の肉声は臨場感あふれるものであったと考えられる。この点からも、小稿では、新聞に報じられた天皇の発言を重視した。

また、もう一点、「炭鉱」の漢字表記について記しておく。資料には「炭鉱」「炭坑」「炭硯」「炭礦」などの表記が見られるが、引用文や会社名などの固有名詞の場合はそのままとし、それ以外の場合は、炭鉱全体については「炭鉱」、個々の坑については「炭坑」と表記した。

1. 炭鉱に関心を強める天皇

侍従次長木下道雄は、1946年1月13日の日記に、学習院の英国人教師レジナルド・ブライスが天皇に提出した覚書の写しと日本語訳を記載している。この覚書は、「人間宣言」作成にも深くかかわった三者、すなわちGHQ民間情報教育局長ケン・ダイク、同局顧問ハロルド・ヘンダーソン、そしてブライスによる鼎談の際のダイクの意見をブライスの記憶によりまとめたもので、そこには「天皇は須らく御親ら内地を広く巡幸あらせられて、或は炭坑を、又或は農村を訪ねられ、彼等国民の語る所に耳を傾けさせられ、又親し

く談話を交えて、彼等に色々な質問をなし、彼等の考えを聞かざるべきである」と述べられていた。この覚書に対し天皇の「御賛意は多大」で、翌14日、天皇は木下に対し「地方御巡幸につき、現在が其の時期なりや否や、総選挙、石炭欠乏、交通事情等につき大臣と協議すべき旨」を「下命」した。⁽⁷⁾そして、2月23日には、天皇は25日に予定されている地方長官への「賜茶」の席で、福岡県知事と北海道長官に「石炭の増産情況」について「下問」すると木下に伝えている。⁽⁸⁾

さらに、前述したように2月に神奈川県への巡幸が実施されると、3月31日、天皇は木下に4月10日以降に全国を巡幸するという腹案を示し、そのうち福岡については「炭坑」と付記している。その際、天皇は木下に、巡幸の主目的は戦災地と引揚者の収容所であり、「その間に炭坑、農業地等を視察する事とし、本年中に全国を一巡する」との意思を伝えている。⁽⁹⁾

このように、木下の日記には、天皇が炭鉱に強い関心を抱いていたことが記されている。全国巡幸を希望する天皇にとり、炭鉱巡幸はその主たる目的のひとつであった。では、なぜ、天皇は炭鉱に強い関心を抱くに至ったのか。もちろん、天皇が炭鉱に関心を強めるこの時期は傾斜生産方式の立案過程であり、労働組合にもそれへの協力が求められていたものであり、天皇も石炭増産を強く求めていたと考えられるが、⁽¹⁰⁾特に天皇は、労働運動の現状を危惧していた事実もまた理由のひとつにあげなければならない。

1946年10月16日、マッカーサーとの3回目の会談をおこなった天皇は、その際、「国民が虚脱状態から士気を回復し復興の希望に立ち上らんとするこの秋、この希望に水を掛けるものは「ストライキ」であります」と断言し、さらに「何事も真似をする場合、権利の面のみを真似し義務の面を等閑に附する事はありがちの事ではあります、日本人の教養未だ低く且宗教心の足らない現在、米国に行はれる「ストライキ」を見て、それを行へば民主主義国家になれるかと思ふ様な者も不尠、これに加ふるに色々な悪条件を利用して為にせんとする第三者ありとせば、国家経済再建の前途は誠に憂慮に堪へぬと申さねばなりません」と言葉を続けている。これに対し、マッカーサーは共産主義への警戒は認めつつも、日本の労働運動は「危険と見える程危険ではない」と述べ、「米国の労働運動は破壊的なものではありません。そういふ労働運動の方向に日本も向はねばなりません」と、日本にも労資協調の労働運動を求め、「ストライキ」は大して心配するに及ばないと信じます」と天皇を安心させている。マッカーサーが、そのように判断する理由は「日本人の健全性が、天皇に対する従来と変りなき尊敬と愛情とに依つて現はされて居」ることであった。マッカーサーは日本には天皇制があり、労働者も天皇を敬っているのだから、労働運動も共産主義には向かわないと考えている。したがって、その場で天皇が巡幸への意見を求めると、マッカーサーは「機会ある毎に御出掛けになつた方が良敷しい」と答えた。巡幸に

より天皇への労働者からの尊敬が高まれば、日本が共産主義に向かうことはないと言っ
カーサーは判断していた。⁽¹¹⁾

このマッカーサーからの助言に続けて1947年12月27日、第1次吉田茂内閣が1947年
度の石炭生産3000万トンを目標とする傾斜生産方式の実施を閣議決定すると、天皇の炭
鉱巡幸への思いは強くなった。石炭の3000万トン生産には労働組合の協力が不可欠であ
り、すでに、吉田は1946年10月19日、「炭礦従業者に対する吉田総理声明」を発し、石
炭の3000万トン生産の「目標達成の能否は炭礦従業員諸君の自発努力に俟つところが大
である」として、労資協調を強く求めていたが、⁽¹²⁾ 1947年1月1日の「年頭の辞」で、
吉田は労働組合を「不逞の輩」と決め付けたことでかえって労働組合の強い反発を受ける
に至ってしまう。傾斜生産方式を遂行するためにも、吉田の放言への反発を緩和し、労働
組合の国策への協力を取り付けることが、重要な課題ともなっていた。⁽¹³⁾ まさにそのと
き、天皇は炭鉱を巡幸し、労働組合に労資協調を求めていく。1947年5月1日、天皇は
吹上御苑・花蔭亭において宮内記者たちと会見した際、全国巡幸への感想を語り、「まだ
炭鉱へは行く機会がなかったが、復興のためには石炭が大事だから、機会があれば炭鉱に
も行きたいと思っている」との意欲を示した。⁽¹⁴⁾

そして、1947年8月5日、天皇は東北巡幸の第一日目、午後0時4分、常磐炭砦磐城
砦業所を訪れるべく、福島県湯本町の常磐線湯本駅に降り立った。「一度は炭坑を訪ねて
みたい」と口癖のように言っていた天皇の強い意思が「万一のことがあつてはという自重
論を押し切つて」今回の常磐炭砦への巡幸が実現したという（『読売新聞』1947年8月6
日）。⁽¹⁵⁾ 宮内記者クラブの一員であるNHK記者阿部薫は、天皇が巡幸を前に側近に「真夏
の暑さとたたかいながら石炭を掘り田の草をとる人々の労苦はどんなであろう、それらの
人々を激励することを思えば暑さなど何でもない」と語ったというエピソードを伝えている
が（『福島民友新聞』1947年8月3日）、天皇の炭鉱訪問への並々ならぬ熱意を感じさせ
る。

このときの巡幸に同行した侍従入江相政は、8月5日の日記に次のように記している。

午後零時四分湯本駅御著車。検分の時炭坑町らしくごみごみと見えたこの町も、今日
は沢山の奉拝者が出て活々としてゐる。便殿で社長の奏上。続いて五坑々口へ、選炭
場へ、六坑々口へ、こゝで従業員組合員を御激励になる。それより人車に召させられ
て十分間降下、坑内を十分間御散歩。切羽から集まつた坑内夫を御激励になる。皆甚
しいズーズー弁で誓つて聖旨に答へ奉る旨を奉答申上げる。又十分で坑外へ、こゝで
曩に御激励賜はつた連中は感極まり「陛下御苦勞様でございました」と申し上げたも
のがある。それより自治会館前で他炭坑の労資代表者に御激励の御言葉を賜ひ、一時

二十二分同所御発、内郷町裁縫女学校前で御自動車をお降り遊ばされ、内郷町民の奉迎を受けさせられて平にお向ひになる。⁽¹⁶⁾

入江の日記によれば、天皇が炭鉱に滞在していた時間は1時間18分ほどであった。しかし、この限られた時間のなかで天皇は、平服のままではあるが、はじめて坑内に入り、労働組合員らと直接、言葉を交わしたのである。

常磐炭鉱の大貫経次社長は「そこにいるのは炭鉱労組幹部で増産に大きな力となつていきます」と天皇に労組幹部を紹介、天皇は「不服なことがあるだろうね」と副組合長の武藤武雄に「下問」する。これに対し、武藤は「日本の現状が苦しいのですからこの苦しさに堪えて再建のために頑張ります」と答え、さらに天皇が「組合の健全な発達を祈っています」と語ると、並んでいた労組幹部の頭が一瞬下がり、武藤は「しつかりやります」とただ一言答え、天皇も「満足げな表情」を示し（『読売新聞』福島版、1947年8月6日）、労資一同は「三千万トン増産を必ず達成します」と答えたという（『朝日新聞』福島版、1947年8月6日）。記者の取材に対しても、大貫は「労資協調いよいよ増産にまい進しお心を安んじていただく」との覚悟を語り、武藤も「陛下は組合運動をお心にかけられ健全な発達を祈ると申されたことは私個人の光栄でなく労組としての光栄であり、わが炭鉱労組も本日を機会に組合運動の発展によつて増炭目的を達成するつもり」との決意を述べた（『毎日新聞』福島版、1949年8月6日）。8月6日付『福島民報』は「労資の協調が比較的スムーズに行われている常磐炭田の経営者、労働者の代表はきょうここに一丸となつてここで陛下をお迎えする喜びに上気していた」と報じた。

また、天皇は、坑内で出迎えた250名の労働者には「苦しいけれど採炭事業は重要だから一生懸命がんばつて下さいね」と、石炭産業の重要性も強調している（『毎日新聞』福島版、1947年8月6日）。これに対し、労働者は「この感げきを増たんにぶちこみます」「へい下のお姿をヤマで拝して感激しています 三千万トン達成に微力ながらも頑張ります」「ヤマで得た二十三年の体験を生かし増たんに励みます」などと、石炭増産への決意を固めた（『いわき民報』1947年8月6日）。

坑内から出た天皇に、労働組合宣伝部長猪狩正男が大声で「御苦勞さまでした」とねぎらい、武藤が「天皇陛下万歳」三唱の音頭を取った。「奉迎」のなかにいた小田炭鉱の労働組合の代表も「労資協調で増産します」と天皇に答えている（『福島民報』1947年8月6日）。さらに、福島県炭協労働組合書記長の大森益雄も「私は陛下から組合問題について御下問を拝したが思召の程只感泣してゐる 今になつて見れば種々答申も出来たであらうが瞬間的には言ひ知れぬ感激で全身が硬直し只ハイと申上げただけだつた 此の上は一意増産に邁進する」との決意を述べている。⁽¹⁷⁾

このほか、天皇を迎えた30年勤続のひとりの労働者は「社会の下積みとされ、平常の社会でない一種特別な卑しい社会と見られ自分達もそうしたあたりの空気に流されて卑下してきたこの炭砒に、この暑熱のさ中に、陛下が親しく御出でになられて、炭砒の私達を励まされ、慰問されるということはほんとに辱い」と感激していた。⁽¹⁸⁾ 猛暑のなか、天皇が坑内に降り、「下積み」の「一種特別な卑しい社会」のひとつと同じ地点に立つという行為が、炭鉱労働者の心を見事に掌握した。⁽¹⁹⁾ 天皇の巡幸を機に、常磐炭砒では労資双方とも労資協調による増炭という決意を新たにしていく。取材をしていた『福島民報』の記者は「この日の坑夫たちの感激しきつた横顔を見て」、「この感激が新聞やラジオを通して全国の炭坑に影響し増炭にびんと響いたらどんなにうれしいことか」と、これまた感激して筆を執った（『福島民報』1947年8月6日）。同様に取材していた『福島民友新聞』の記者たちも、天皇が炭鉱の坑内にまで降りた事実を重視し、「地下にまで入られた陛下のあたえた影響は大きい、裸のままで陛下と直接お話しをしたのはいままでにそう例がないだろう」と述べ、石炭増産への期待を感じていた（『福島民友新聞』1947年8月11日）。

『毎日新聞』は、天皇の巡幸があった8月5日、常磐炭砒湯本労働組合事務所で「御下問を拝して感激もまださめやらぬやまの人々を中心」に「陛下のお姿に接して」と題する座談会を開くが、そこでは「健全な組合の発展を祈るとのお言葉については組合の幹部としてもつともつと建設的な方向に進まねばならぬと考えます、今日の感激は明日からの増産にハク車をかけましょう」（労働組合支部長・渡辺兼太郎）、「御苦労だが増産して下さい、そして健全な組合の発展を祈る、との有難い御言葉をうけました」（武藤武雄）、「労働者だけでなく資本家、事業主にも組合運動の事を聞かれている 陛下もこうふんはされておられたでしょうが、組合というものを懸命に研究されておられることはたしかでした」（全炭中央執行委員・猪狩政雄）、「陛下から増産は国家再建の原動力であることを仰せられ、また組合の健全な発達について御言葉のあつたことは全坑夫の感激を新たにしたいと思います。こんどこそお互が自発的に能率をあげることに努力しなくては申訳ない」（労務事務員・小林しげ子）、「陛下が「困難だろうが増産を」「組合の発展を」と申されたのは組合員の意識を向上させるための御激励と思います、その意味で是非とも日本で一番立派な組合、良い山にしなければなりません」（幹線・高原卯吉）など、労働組合の「健全な発達」による増炭への決意が口々に語られていた（『毎日新聞』福島版、1947年8月7日・8日・9日）。

同じく、『読売新聞』も8月6日、同労働組合事務所で常磐炭砒労働組合長渡辺勝二、同副組合長武藤武雄らによる「人間天皇と増産」という座談会を開くが、その場でも労働組合幹部から「われわれは理くつはぬきにして炭鉱人としての責任と義務から国家の再建に全力を傾けなければならぬと痛感した」「労資代表一人々々にお言葉を賜わつたが、そ

れがだれにでも「労働組合の健全なる発達をお願いします」というのだつた……（中略）……陛下のお心にはこの労組の健全なる発達が日本を救うのだとお考えで一杯、それがあのお言葉となつて現れたのだと考える、しかし、また天皇のお言葉の裏には不健全な組合もあるのだということを示しめされたのだと考える時、われわれは緊禪一番やらなければならないと思つた」「今回の行幸はひとり労働組合の光栄ではなく全国労働組合の感激だよ」という発言がなされ、「とにかく食糧事情がどんなに悪くともわれわれは増産せねばならない」との発言で座談会は締めくくられた（『読売新聞』福島版、1947年8月7日）。

さらに、巡幸に感激したのは天皇を直接迎えた常磐炭田の労働者だけではない。遠く離れた長崎県北松炭田の潜龍炭鉱の労働組合も、天皇が坑内に降り労働者に「採炭は重大だから一生懸命やつて下さい」と語ったことに感激し、「四十万の炭礦同志諸君よ、吾等の手に依つて歴史を築こうではないか」と呼びかけている。⁽²⁰⁾ 坂本孝治郎は、「東北巡幸の目玉」は、食糧増産とともに「傾斜生産方式重点項目である石炭増産の激励」にも置かれていたと指摘しているが、⁽²¹⁾ それに加えて労資協調の推進もまた重要な目的であったのである。⁽²²⁾

1947年8月19日、東北巡幸の途次、天皇は、福島・翁島の高松宮別邸で宮内担当の記者に巡幸の感想を語った際、初めて炭鉱の坑内に入ったことについて「ああいうところで働き続けることは、よほどの体力と気力がいると思つた。だが坑内に迎えてくれた労働者たちは元気で、石炭の大事なことをよく了解し、働きがいを感じているようだった」と、労働者の対応への満足を口にしていた。⁽²³⁾

この後、1947年12月3日、天皇は中国巡幸でも山口県宇部市の宇部興産沖ノ山鉱業所を訪れている。直前に山口県警衛本部がおこなった調査では、沖ノ山炭鉱の鉱員組合と職員組合とについて、ともに「右翼的色彩を帯び共産党員五名を現在掌握し居る状況である尚朝鮮人三名介在するも特異動向を認めない 待遇改善を繞りて興産本社へ賃金値上げを要求（再度）せるが円満解決を見目下更に待遇改善を目指して中央本部へ賃金値上げを交渉すべく企図し居るが治安に憂慮すべき点は認められない」と報告されている。⁽²⁴⁾ 沖ノ山は模範的な労資協調の炭鉱であった。

同鉱業所では、「五千人の従業員がキャップランプにつぎはぎだらけの作業服」で出迎え（『朝日新聞』1947年12月4日）、天皇は「万才、万才ッ！」という「歓呼の絶叫」のなか、約30分にわたり視察（『日刊宇部時報』1947年12月4日）、ここでも労働組合の幹部に対し「色々苦しいことがあるだろうが石炭は重要産業だからしつかりやつて下さいね労働組合の健全なる発達を祈るよ」と語ると、松原組合長は感激で目を潤ませながら「はいッ御言葉を全組合員に伝えまして一層増産を励み三千万トン増産は是非完遂いたします」と誓っている（『日刊宇部時報』1947年12月5日）。天皇は、このほか、「石炭は重要産業だからしつかりやつて貰いたいもんだね」と個々の労働者にも語りかけている。労働

組合の執行委員のひとり「数多くある炭鉱の中からひとり本鉱に陛下をお迎えしたことは感激に堪えません。われわれは今日のこの感激を生産にぶちこんで一層の増産を固く固く陛下にお誓いしました」と決意を新たにした（『防長新聞』1947年12月4日）。

また、前年11月に宇部市聯合青年団の宮城奉仕団の一員として皇居の清掃作業中に天皇と皇后良子に「拝謁」した経験がある沖ノ山炭鉱労働組合員のひとりの青年は、その経歴故に巡幸の際は、「特別拝謁」の機会を得て、「感激をそのまま石炭増産に邁進すべく一層の努力を誓つ」ていた（沖ノ山炭鉱労働組合『沖ノ山労報』14号、1948年1月10日）。

山口県当局も、沖ノ山炭鉱巡幸について、天皇は松原労働組合長をはじめ労働者に対し「いろいろ不自由しているだらうが石炭は重要な産業だからしつかり増産してもらいたい。労働組合の健全な発達をのぞむ」と言葉をかけ、「生産復興への御激励と共に労働組合活動についての深い御理解の程を示された」と評価、この天皇の言葉を受け、「所長はじめ従業員一同は不自由を堪え忍んで三千万トン出炭のため、あらゆる努力を続けてきたのであるが更に感奮興起して祖国再建に寄与するよう堅く誓つた」と記録している。⁽²⁵⁾

沖ノ山炭鉱業所鉱友会では翌1948年1月15日、巡幸時に「御下問のあつた方の感激を語る座談会」を開くが、そこで、いちばん長く「御下問」を受けた労働組合長の松原は、天皇から「石炭は重要産業だからしつかりやつて下さいね。労働組合は健全なる発達を祈ります」と言われ、「御言葉を全組合員に伝えまして一層増産を励み三千万トン増産は是非完遂いたします」と感動でしどろもどろになりながら答えたと回想している。⁽²⁶⁾

では、天皇の巡幸により沖ノ山炭鉱では石炭は増産されたのだろうか。これについては、山口県下の巡幸を取材した毎日新聞記者の中川左近が、GHQ民政局のハッカー大尉に送った私的報告書が示唆的である。この報告書のなかで、中川は「宇部沖ノ山炭鉱では行幸前日と当は一一〇%の出炭ではあつたがそのごは平常化」と述べ、巡幸は「一部分又瞬間的には増産に役立ったが二、三日たったのちには何等の好影響も与えていない」ことを指摘、さらに沖ノ山炭鉱次長俵田實夫の「天皇の行幸は増産に影響はない それを求めるのはムリだ、ただ神から人間になった、日本人の父を心から迎えたにすぎない」という談話を紹介している。⁽²⁷⁾ 石炭の増産は精神力のみで達成できるものではない。しかし、増産を目指して労資双方が協力することで労資協調は進行する。ここにこそ、天皇の巡幸の政治的効果があつたと言えよう。⁽²⁸⁾

2. 争議渦中の筑豊に立つ天皇

1948年2月12日、九州地方県知事代表(九州地方県協議会長)として福岡県知事杉本勝次は首相片山哲に対し「天皇陛下の九州地方御巡幸について御願」と題する文書を提出し、「九州は石炭及鉄鋼、化学生産、農産、林産等日本再建の原動力として大なる役目を

果しつつあることを理由に春に天皇の九州巡幸を実現するよう懇願した。これに続けて、福岡県議会議長稲垣稔も、同年3月30日、同様の「天皇陛下の九州地方御巡幸について」という文書を片山首相に提出し、やはり「再起日本」の使命達成のため、北九州では石炭、製鉄、化学生産に「不断の努力を傾注致しておる」と力説していた。このように、九州巡幸を求める理由の一つに炭鉱への激励があった。⁽²⁹⁾

しかし、1948年11月11日、GHQは賃上げを追認するような物価値上げを禁止するなどのいわゆる賃金3原則を第2次吉田茂内閣に指示、さらに12月18日、アメリカ政府指令の経済安定9原則を発表すると、状況は一変する。冒頭で述べたように、1949年3月以降、ドッジラインの下で深刻な不況が進行するなか、石炭は供給過多となり、各炭鉱の貯炭量が累増すると、石炭産業はそれまでの傾斜生産方式の下での増産の奨励から一転して過剰生産への対応に追われ、経営側は合理化と賃金値下げを労働者に求めてくる。⁽³⁰⁾ 1948年度の石炭生産目標は3600万トンであったが、1949年2月段階で生産は3100万トン強に止まり、石炭業界では労働者への賃金遅配も深刻化していた。⁽³¹⁾ さらに、3月10日にGHQが発した指令「炭産業安定に関する六原則」により超過労働賃金などの支給の抑制が求められ、経営側による労働者への引き締めが強化された。⁽³²⁾

これに対し、危機感を持った労働組合側は、1949年4月、分裂していた組織を日本炭鉱労働組合連合会（炭労）の下に統一、ここに炭労は全国の炭鉱労働者の9割以上の48万名余を組織することになり、労資対決の姿勢を鮮明にし、GHQが吉田内閣に争議の円満な解決を求めるなか、5月3日より事実上の賃下げ案に反対するストライキに突入する。⁽³³⁾ それまで比較的、協調的であった炭鉱の労資関係は一気に緊迫した。⁽³⁴⁾

まさに、こうした1949年5月、天皇の九州巡幸が実現したのである。1947年に、天皇が傾斜生産方式下の常磐、宇部の炭鉱を巡幸して増産奨励のための労資協調を求めたときは、炭鉱をめぐる状況は大きく異なっていた。天皇は、こうした緊迫した状況下の北九州の炭鉱を巡幸する。

宮内府長官田島道治が5月11日に首相吉田茂に報告した「福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、宮崎、大分各県下行幸御日程」によれば、天皇は5月17日に東京を出発し、京都で一泊した後、18日の午後7時40分に福岡県の小倉駅に到着、20日に筑豊に入り、直方・田川・飯塚の炭鉱地帯を回り、23日に佐賀県唐津炭田の杵島炭鉱、24日に長崎県北松炭田の潜龍炭鉱、さらに29日には再び福岡県に入り大牟田市の三井三池炭鉱を訪れることになっている。26日間にわたる九州巡幸において炭鉱の訪問は重要な目的の一つとなっていた。⁽³⁵⁾ 福岡県での巡幸日程には「特に炭鉱に重点をおくこととなっていた（『九州タイムズ』1949年4月13日夕刊）。田川市の地元紙『九州新報』は、5月20日の社説「天皇陛下奉迎」で、「伝へるところによると今回の九州巡幸には格別の御関心をも

たれ、とくに炭鉱地の御視察は一段の御期待をかけられているそうだ」と伝えた。

この福岡県下の炭鉱巡幸については、すでに4月初旬から商工省福岡石炭局により巡幸候補炭鉱の選定が始まっていた。当初の候補地は、「第一日に三井田川鉱と山野の産業医学研究所、第三日に三池鉱の予定」であったが、「三井系のみの御視察にかたよってはとの意見」が出て、この案は撤回され、さらに「大手筋ばかりでは……という意見から飯塚、直方地区の小ヤマ（B級）の坑外を一箇所だけ御覧に入れるよう候補鉱を選定」することになったという（『九州タイムズ』炭鉱版、1949年4月9日夕刊）。

これに対し、4月29日、日本共産党福岡県委員会は「天皇の旅行に関する声明」を發し、「侵略戦争の最高責任者である天皇が政治的行動のためにこのこ出歩くこと」に強く反対し、天皇巡幸のための「財政支出や労働強化や特高的査察による人権じゅうりん行為」に抗議した（日本共産党福岡県委員会『県委ニュース』12号、1949年5月2日）。当時、日本共産党の党勢においては、「筑豊の党は、これまで炭鉱を基盤としており、党員の構成は、大半が炭鉱労働者」であり、ある炭鉱では、「労組幹部の大量入党をふみ台として、炭鉱所在地の町長が入党」したという。⁽³⁶⁾まさに、筑豊の炭鉱は共産党の拠点でもあった。天皇はそこに足を踏み入れることになる。

さらに、巡幸当時、炭労の方針の下、筑豊炭田はストライキの渦中にあった。5月14日午前0時、筑豊の全炭鉱が72時間ストライキに突入、すでにストライキに突入していた九州全三菱炭坑労働組合連合会（九全連）傘下の三菱飯塚炭鉱では錆び付いたレールの上で百数十台の炭車が放置されるという状況であった（『西日本新聞』1949年5月15日）。まさに、「筑豊炭田は九全連傘下のストの中に天皇陛下をお迎えした」ことになる（『毎日新聞』1949年5月21日）。

福岡県当局もまた、天皇が筑豊を巡幸したのは「折しも九全連傘下の鉱山ストのさ中で真の民主的労資関係の設定へ陣痛をつづけている」ときであったと認めていた。⁽³⁷⁾直方の地元紙『九州世論新聞』は6月15日の紙面で、天皇に「戦災者やスト代表が直訴する」という噂があったと記しているが、巡幸直前には、宮内府に「三井関係炭坑には一、二御視察の御予定地が在るが所謂経済三原則経済九原則の強行に伴う赤字補給金復金融資停止打切りは炭坑経営を愈々不随化して居り既に三井系炭坑は給料が八割支給二割棚上げを声明し労資対立の状況にありこの傾向は他の炭山方面にも波及し同様の措置が予想されて居り労働組合側を相当刺戟してゐるので炭坑御視察の際直訴などの不敬を敢行する虞も有り注意を要するものがある」との警察情報も寄せられていたのである。⁽³⁸⁾

ストライキについては、末広巖太郎中央労働委員会長の5月18日の徹夜の斡旋で労資双方が妥結に向かい、炭労は天皇が筑豊入りするその日、20日から全国大会を開いて中労委・労・資3者の調停書に調印、ようやく終息の方向に向かうが、九全連傘下の24鉱

はさらに無期限ストライキの続行を決めていた（『西日本新聞』1949年5月20日）。

天皇は赤旗が翻る筑豊の炭鉱を巡幸することになる。不測の事態も予想された。しかし、労働者は天皇を熱狂的に迎えた。天皇にとり九州を訪れたのは5回目であるが、筑豊を訪れたのはこのときが初めてで、直方、田川、飯塚を中心に炭鉱のひとつとは前夜から沿道や奉迎場に詰めかけた（『夕刊新九州』1949年5月20日）。5月20日付『九州タイムズ』夕刊は、次のように伝えている。

はじめて天皇をお迎えした筑豊炭田は、その五月、石炭界はじまって以来の全国的波状ストが矢つぎ早に山の企業を大きくゆすぶり、去る四日から無期限スト第十七日目をむかえ解決の糸口をまだ見出さない三菱系新入、方城、飯塚、鯉田、上山田などをはじめ、十八日からこれまた無期限ストに突入した日炭系高松、山田など奇しくも“スト”の真たゞ中、しかし“われらの天皇陛下”によせる礼儀と秩序は少しも失われずこの日をわざわざ公休に振り替え自重歓迎するヤマの人達だった。また連日資金カンパに疲れ、赤ん坊を背負ったおかみさん達、日に焼けた労組員たちが腕章を巻き小箱を抱え、沿道に並び、日の丸の小旗をうち振る人波の中には涙さえたゝえた老鉱夫の姿が痛々しい。

こうして、1949年5月20日、混乱もなく予定通り、天皇は筑豊を巡幸、直方、田川、飯塚の炭鉱三都を巡った。取材で巡幸に同行した『朝日新聞』の記者は直方から田川までの沿道に人が尽きず、「まるで人の帯だつたよ。炭鉱地帯だけれど、片側に二列に並んでね」「ストをやっている組合員も出て来て歓迎したので、そういう点では陛下もかなり心をうたれたらしい」と、筑豊での熱烈な歓迎ぶりについて語っている。⁽³⁹⁾ 巡幸に同行した侍従入江相政もこの日の日記に次のように記している。

黒崎の駅から直方まで三十八分間汽車。この御沿線の奉迎も大変なものだ。直方の奉迎場たる北小学校。この前後の細い道は人で一杯だが、辛うじてくづれずに済む。炭鉱保安研究所、続いて筑豊鉱山高等学校、こゝも非常な熱狂だつた。それより堤防の上を長く長く御自動車。五十五分の御予定だつたが、実際には奉迎者が非常に多かつた為か二十分程もお遅れになつた。田川市役所へ着御。御昼食。それより三井中央グラウンドの田川奉迎場、続いて三井鉱山田川鉱業所、こゝは便殿の奏上。続いて三井鉱業所の御展望の後、この鉱業所の^{ママ}工員始めこの附近の各炭鉱の^{ママ}工員に沢山お会いになる。それより庄内村公民館、続いて市営グラウンドの飯塚奉迎場、それより嘉穂郡二瀬鉱害地を経て飯塚駅より御乗車。⁽⁴⁰⁾

天皇は、筑豊では炭鉱だけではなく、炭鉱関連施設、そして地下に縦横に掘られた坑道により地上の土地が地盤沈下する鉱害の被害地にまで足を運んでいる。20日はすべての日程を炭鉱の巡幸に充てたとと言っても過言ではない。それまでの東北巡幸時の常磐・湯本炭鉱や中国巡幸時の宇部・沖ノ山炭鉱の事例と比較しても、九州巡幸では炭鉱がより重視されていたことが理解できる。

最初に訪れた直方では、天皇は炭鉱の中堅技術者を養成する筑豊鉱山高等学校を訪れている。天皇を迎えたある生徒は、「天皇だつて同じ人間ではないか！ 天皇だつて人間だ。たつた一人の人間の為に多くの費用と労力を費やすのは、ばかばかしいぢやないか」という反抗心を抱きつつ、実際に天皇から言葉をかけられると「胸はふるえて顔をまともに拝することはできなかつた」と感動し、涙をこらえたという。⁽⁴¹⁾

そして、いよいよ天皇は田川に向かう。三井中央グラウンドに設置された田川市奉迎場で、天皇は「福岡県下全炭鉱労資代表四百五十名、三井田川従業員一千五百名」の出迎えを受け（『筑豊タイムズ』1949年5月23日）、その後、三井田川鉱業所へと歩を進めた。天皇の巡幸が決まると、田川鉱業所では「陛下がこられるのに赤字はだしておけぬ」と全従業員の増産意欲は、が然高まり出炭日報のグラフはぐんぐん上昇し（『西日本新聞』1949年5月8日）、田川鉱業所の所長筒井久次郎は天皇に「当所の労働組合は穩健中庸で御座いまして経営者、組合共に力を合せ増産に邁進して居ります」と説明している。⁽⁴²⁾

これに対し、天皇は、所長に坑道の長さや深さなどを質問した後、「石炭は第一の基本産業だから衛生設備をよくして元気に働けるようにネ」と述べている。はじめて天皇に接した労働者は、「人間天皇ということがよくわかった。ストどころではない、ただ増炭に懸命になるぞという気持ちで一ぱいになった」と、その印象を語っている（『西日本新聞』1949年5月21日）。また、天皇は優良鉱員として奉迎席にいた井浦嘉七に「みんなよく働いているようで御苦労です、色々な困難があるだろうが石炭は基礎産業だからこの上ともがん張って国民の要請に応じて下さい」と激励、井浦も「四千二百万トン達成のため粉骨砕身努力致します」と答えた。「石炭は基礎産業」と天皇はその増産に期待を表明した（『九州タイムズ』炭鉱版、1949年5月21日夕刊）。経営側の代表のひとりとして天皇を迎えた古河鉱業目尾しやかの尾形権三郎も、労資の代表を激励する天皇の姿に「日本の民主化の重大さと偉大さを痛感」し、深く感動していた。⁽⁴³⁾

こうした労働者と天皇の会話をそばで聞いていた外国人記者も「これで争議は解決した」とポンと手を打つた」というが（『毎日新聞』1949年5月21日）、福岡県当局も、田川鉱業所で天皇が「石炭は国家のために最も重要だから、困難もあらうがしつかりやつて下さいね」と労働者に諭し、これに対し、三菱新炭鉱の職員や三井田川鉱の労働者が交々「しつかりやります」「私たちも一生懸命にやります」と答えると、側にいた外国人記者

が「これでストも解決した」と漏らしたと記録し、この事実を認めている。⁽⁴⁴⁾

たしかに、田川では、「スト中の三菱九全連」が「日の丸の小旗をこしらえ奉迎者に一本五円以上で売り、陛下のお迎えには見苦しい姿をお見せしないと腕章もカンパの箱も外して日の丸の小旗を打ち振ってお迎えし」（『朝日新聞』1949年5月21日）、田川炭鉱労働組合もまた、機関紙『たかは』14号（1949年6月1日）において、「陛下を迎えてボタ山に映ゆる日章旗」と、天皇の巡幸を感動的に報じている。田川鉱業所職員組合機関紙『炭友』24号（1949年6月15日）には、天皇を「余り近々と拝したので、何だか本当の人間になつて失舞つた様で、俺は神であられる陛下が懐かしい気がする」という労働者の声も紹介されている。さらに、田川市の地元紙『日刊筑豊』は5月24日の紙面で「日頃天皇制打倒を絶叫する一共産党員でさえ、熱狂する歓迎ぶりを見て一瞬何もかも忘れ、ただ感慨無量でした」と語っていた」と報じた。

天皇は、この後、二瀬町の鉱害被害地も訪れ、被害住民に対し「つらいだろうが石炭増産のためにしっかり堪えてもらいたいね」と語っている。天皇にとり、石炭増産は国家再建の基本であり、そうであるから坑道により地上が陥没する鉱害にも堪えることを求めている（『九州タイムズ』炭鉱版、1949年5月21日夕刊）。そして、飯塚市の奉迎場でも、天皇は「石炭は日本経済再建の根幹だからしつかりやつてネ」と「優良鉱員」たちを励ましている（『筑豊タイムス』1949年5月23日）。まさに、天皇の巡幸によりストライキよりも増産という機運が炭鉱を覆っていった。21日間続いた三菱系九全連の無期限ストライキも24日、労資双方の妥結で中止となり、26日から本格的に出炭が開始されることになった。これにともない、「筑豊一帯の街に出ていた資金カンパ隊も全く姿を消しストの街飯塚も平穏にかえった」（『朝日新聞』筑豊版、1949年5月26日）。

天皇の巡幸を境に筑豊の炭鉱争議は解決していく。警察当局は「多くの工場鉱山の所在地として多数の労働者と思想的洗礼を受けた急進分子を呑んでいる北九州地帯の巡幸は凡有面より尠からず危惧されていたが国民の胸奥に波搏っている天皇敬愛の感情は各所に露はれ感激をよんだ」と安堵し、その結果「賃上問題で斗争の炭労傘下各炭坑組合員の出炭目標達成のために敢闘する旨の奉答など今後の組合運動に尠からぬ影響」があるだろうとの予想を示している。⁽⁴⁵⁾ このように、天皇の巡幸は筑豊の炭鉱の労働組合に増産と労資協調を進めさせるうえで大きな契機となったのである。

3. 杵島から潜龍へ炭鉱をめぐる天皇

天皇は5月21日に福岡市内を巡幸し、22日には佐賀県に入る。23日、天皇は佐賀県唐津炭田の杵島砒業所を訪れ、まず、会社と労働組合双方の関係者を激励した（『朝日新聞』佐賀版、1949年5月24日）。これに対し、杵島砒業所の社長高取九郎は、天皇への

「奏上」のなかで「労働組合の事を申し上げますれば、職員及び鉱員の両労働組合が設立されておまして、日本炭鉱労働組合連合会（炭労）に加盟しております。全組合員は概ね穏健にして組合は健全なる生長を遂げつつありまして、労資協調増炭に邁進致しております」と、労働組合の状況について説明している。⁽⁴⁶⁾

その後、天皇は「しっかりとのみます、と従業員代表を力強く御激励ののち君が代合唱の中を御自分でカサをさゝれぬかるみの十字路を埋める鉱員と、その家族一万の旗の中を右に左に折返し慰問」し（『朝日新聞』1949年5月24日）、「県下炭鉱代表者および優良鉱員ら百余名に「しっかりと増産に励んでください」とご激励、本社表彰の燦然たる優良鉱員章を胸間にかざつたヤマの選士^{ママ}たちは「陛下のご期待にそうよう出炭目標完遂に一層努力しよう」と心から誓つた」（『佐賀新聞』1949年5月24日）。

この日、天皇を「奉迎」した小城炭鉱のひとりの労働組合員は、その喜びを次のような歌3首に表している。

春秋に富ませ給へどみ頭は 白くおはしてなつかしみ深し
都を遠みひなの匂ひは畏けれ 今宵の御寝は如何にあらむか
海はよせ山は低みて今日の 行幸ことほぎ迎えまつれり⁽⁴⁷⁾

杵島炭鉱においても、労働者は天皇の巡幸に歓喜した。⁽⁴⁸⁾そして、天皇は翌24日、長崎県に入り、北松炭田の住友潜龍鉱業所を訪れる。当時、北松炭田も不況の渦中にあった。4月に北松炭田での給料の不払いや遅配は深刻化し、江迎労働基準監督署の調査では、「管内五十八の炭鉱中満足に給料を払っているのはわずか数鉱でひどいところでは一月から各人三千円余を渡しただけというのがある」という状況に陥っていた（『長崎新報』炭鉱版、1949年4月23日）。深江炭鉱では、4月25日、労働組合が3月分の給料の支払いを求めると、会社側は支払い能力がないと突き放し、26日、突如、炭鉱の閉鎖を宣言していた（『長崎新報』炭鉱版、1949年4月28日）。こうしたなか、潜龍炭鉱では、労働組合のなかで共産党員の活動が活発であった。警察当局は潜龍炭鉱の共産党員の数を約50名と把握しているが、巡幸の前日の5月23日、次のような情報を宮内府に伝えている。

巡幸予定地として指定されて以来最近に於ける出炭成績は坑内条件の悪化等が原因となつて著しく悪化し目標出炭量よりも約五〇〇屯を下廻るの状況を呈するに至つた

この生産不振を憂慮した労組幹部は巡幸を目前に控えて何等かの打開策を講ずべく種々検討した結果五月一日メーデーに際して組合蹶起大会を開催し出炭目標突破その他について協議をなすことに意見の一致を見るに至つた

五月一日には全鉱会館で約一四〇〇名の組合員が集り 1 全員蹶起して目標突破
2 天皇巡幸の歓迎対策 3 巡幸時に於ける不祥事件の防止対策等を議題として組
合大会を開催し先づ全鉱労組長山口初郎より「県下数多い炭山の中から天皇巡幸の炭
鉱に選ばれたことは吾々鉱員としても名誉の上もないことである ところが最近の
出炭状況を見るときは目標出炭量より約三五%の下廻りを来し生産率は極度に低下し
つゝあるので吾々は巡幸地として指定を受けた名誉にかけても従業員が一致結束して
出炭量の上昇に努力しなければならない 又我々としても 天皇歓迎には万全を尽す
べきである」等の挨拶を為した

この情報は続けて、このとき、共産党員からは「天皇はかつて一銭五厘で国民を呼び出
して銃火の前に立たせて見殺しにしその代償として鶏一羽代に等しい六百余円を与えた」
「物見遊山ならばやめて貰いたい 本当に生産激励の意味で来られるなら鉱員宅を一
軒々々廻つてその実状を見て貰いたい」「巡幸だからと言つて特別に飾らなくてもよい
坑外の掃除等もつての外だ」などの反論があったことも記している。⁽⁴⁹⁾

こうしたなか、天皇が巡幸するわけであるから、侍従の入江は共産党の動向には注意し
ていた。5月24日の日記には次のように記している。

二時二十一分潜龍駅御着。前後したが伊万里駅の辺のある駅で若い学生がにやにや
笑ひ乍ら大きな赤旗を振つてゐた。駅から炭鉱迄御散歩。この間に附近の町民奉迎。
この頃から空は曇つて来た。鉱業所の入口に赤旗が一つ。便殿で奏上した後、鉱口、選
炭場等をお廻りになつて御立ち、お帰りの時駅の所にさつきの赤旗が又来てゐた由。
後から聞くとインタナショナルを歌つてゐたさうだが、万歳の声に消されて我々には
聞えなかつた。⁽⁵⁰⁾

しかし、特に巡幸を妨げるような事態も起こらず、巡幸は無難に進行する。鉱業所の事
務所前では労働組合代表250名が、坑口では労働者600名が天皇を出迎え、これに対し、
天皇は「しっかり頼みますよ」と言葉をかけた（『朝日新聞』長崎版、1949年5月25日）。

鉱業所の専務は天皇に「今後とも労資一体、生産の増強と経営の安定を期します」と答え、
天皇は大きくなつた（『佐世保時事新聞』1949年5月24日夕刊）。まさに「こゝには
もう労資の対立は微塵もない、たゞ眼に浮かぶのは陛下の慈愛に満ちたお言葉とお姿だけ」
という労資双方の感激した光景が展開された（『長崎民友新聞』1949年5月25日）。潜龍
炭鉱の「沿道の土手の上には赤旗が打立てられていたがこれらデモ隊は歓呼の嵐と日の丸
につつまれてしま」い、天皇から激励された江迎炭鉱労働組合の委員長は「御言葉に副い

あらゆる努力を惜しまないことをお誓い申し上げます」と答えた。天皇が潜龍炭鉱から徒歩で最寄りの潜龍駅に向かっていたとき、炭鉱の共産党員数名が「赤旗を振つて奉迎してゐたがその中の一人が陛下の悪口らしきことをつぶやいているのを予て注視中の江迎町署員が耳にしたが周囲の熱狂ぶりに一般奉迎者は聞きとがめるものもなかつた模様」であつたという。⁽⁵¹⁾ まさに、入江の日記の叙述どおり、「共産党員の赤旗とこの労組長の感激に満ちた言葉は面白いコントラストを描いた巡幸中の一コマ」に過ぎなかつたのである（『夕刊フクニチ』鉱山版、1949年5月25日）。むしろ、「天皇陛下県民と共に在り」という「潜龍、佐世保の感激」がそこに生まれていた（『長崎日日新聞』1949年5月25日）。

4. 坑内服で入坑する三池の天皇

天皇はその後、再び福岡県に入り、大牟田市の三池炭鉱に向かう。5月29日、天皇は大牟田市に到着、三井三池鉱業所の三川坑で地下深く坑内に入る。大牟田市の地元紙『サン・タイムス』の記者小田原恭平は、三川坑に到着した天皇は「御血色も冴えられず、御口ひげも可なり伸び」るなど「特に御疲労の御様子であつた」と伝えているが（『サン・タイムス』1949年6月3日）、天皇はそのまま予定をこなしていく。

侍従の入江は、日記のなかで、「九時五十分に三池三川坑にお着き。奏上の間に我々は着物を替へる。それからお上の御召を願ふ。我々のは紺でお上のは白でなかなかよく考へてゐる。白で非常に品のいゝものであつた。御入坑前に人車の所でお立ちになり、下に並んでゐる人たちに御会釈の後御入坑、坑内でも色々御言葉を賜はり、非常に難有いことであつた。十一時三十分に御立ち」と記している。1947年の常磐炭田巡幸のときは平服のまま入坑したが、今回はわざわざ白の坑内服を用意し、それに着替えて入坑している。炭鉱での滞在時間も常磐炭田では1時間18分であつたが、今回は1時間40分と長くなつていた。⁽⁵²⁾ 天皇は三池炭鉱でどのような言動をなしたのか。詳細に見ていこう。

天皇が入坑する坑内には「天皇^{きりは}切羽」（切羽とは、採炭の現場）が造られた。「実際にはその場所では掘らないが、奥にお入りになり、ケガでもされたら大変なので、そこに機械もカッターも全部揃え石炭を掘り出すための機械による切り方や、人員配置のことなどご説明することになつていた」という。⁽⁵³⁾ 三池鉱業所が発行する『くろだいや新聞』は6月1日号で「巡幸記念特輯」を組み、天皇が「坑内杖を御手に御更衣所より第一坑に向われる途次、組合幹部の前でお立ちどまりになり宮川三鉱労組事務局長らに、“しつかりやつてくなれァ、基礎産業だからな、組合の健全な発達……、あとは万歳の声で途切れ、労組幹部は両眼をうるませ乍ら、しつかりやりますと旗を打ち振つて陛下をお送りした」「（坑内では）陛下はチプラーを御覧になつた後、組合幹部がお待ちする十六番に歩をお進めになつて、阿具根三鉱労組々合長以下とお会になり“石炭は重要な部門ですから益々しつか

りやつて下さい、と御激励、阿具根組合長が「皆んなと力を合せてガン張ります」とお応えすると「組合の健全な発展を祈ります、と組合運動のことにも言及され、……（中略）……廣松三鈷職組々合長の「天皇陛下万歳、の声にセキを切つたような「万歳、が坑内にひびきわたつた」と、そのときの状況を描写している。このような状況に立ち会ったGHQ経済科学局鈷業部石炭調整官代理のシュワープは「今度の御視察は石炭増産の奨励に重要な意義をもつものと思う、労働者諸君も日本経済復興のため全力を尽して増産に励んでもらいたい」との感想を語ったという。

坑内で天皇から直接、言葉を掛けられた労働組合長の阿具根登は、天皇が「われわれと同じ鈷員姿で組合の健全な発達をいのるよ」と言ったことに「国民統合の象徴としての天皇のお姿をしみじみ感じ」「みんなと力を合せて日本の民主化、経済の復興のため増産に精励する事、これがご視察の陛下に捧げる組合員の感謝の言葉だ」と決意を述べている（『くろだいや新聞』1949年6月3日）。

阿具根は、巡幸直後に、「陛下を坑内にお迎えして」という手記を記し、そこでも、感激を綴っているが、それによれば、阿久根は坑内に降りてきた天皇を見ただけで「胸がふさがる」思いがして、天皇から「石炭の重要性にかんがみ日本再建のために是非しっかりやって欲しい」と言われると「ぐっとのどが詰ってごくりとツバをのみこみやつと「全組合員しっかり手を握り合って石炭増産に一層努力致します」と申上げ、感極まってうつむいてしまった」という。さらに、天皇から「健全な組合の発展を祈ります」と言われると、阿具根は「何か熱い陛下の御心が伝わって来たようで全身が堅くなるのを感じずにはおれず、「期せずして全員万歳を心の中から叫んだがお去りになる陛下をお慕い申上げたいような衝動に駆られて仕方がなかった 日本再建のため健全な組合の発展をこれほどまでに祈念されているのかと思うと感動でふるえる全身にみなぎる熱い何とも表現できない意思が「よしやろう！」と私の心にひらめいた」と手記をまとめている（『九州タイムズ』炭鈷版、1949年5月31日夕刊）。

さらに、阿具根は後日にも、「(天皇は)私共と同じ鈷員姿で御入坑になり、私共に対し「組合の健全な発達を祈る」とおつしやつた。私共の御答に対しても、よくお聞きになり「皆さんご苦労さん」と御激励になつた時は、こらえかねて皆が泣いた。国民統合の象徴としての天皇のお姿をしみじみ感じた。……（中略）……皆と力を合せて日本の民主化、経済復興の為め増産に精励すること、これが御視察の陛下に捧げる組合員の感謝の言葉であります」と、「組合の健全な発達を祈る」という天皇の発言への感動を語っている。⁽⁵⁴⁾ 福岡県当局も、「お待ちしていた三池鈷職員組合長広松幸太郎、同労働組合長の阿具根登両氏に「石炭は日本の重要な基礎産業ですからがん張つて下さい」と激励、これに応じて阿具根組合長が「組合員一同、手を取り合つて増炭します」と力強く誓い、「健全な組合のため努力

して下さい」と繰り返えされた」と、阿具根と天皇の会話を巡幸記録に残している。⁽⁵⁵⁾

もちろん、巡幸に感激したのは組合長の阿具根ひとりではない。三池炭鉱労働組合は、機関紙『みいけ』102号（1949年6月6日）で、天皇の巡幸を「採炭現場を御視察 陛下三川鉱へ御入坑」と題して一面トップの写真入り記事で報じ、阿具根登の談話を掲載しているが、ここでも、阿具根は天皇の「日本経済再建の為重要な重要な基礎産業ですから益々頑張つて増産に努めて下さい」「健全なる組合の発展を祈る」という発言について、「これは単に組合幹部に対する御言葉ではなく、組合全員に賜つたものと解釈すべき」として、「吾々は此の日の感激をその場限りに終らせる事なく、組合の健全な発展、国家再建の為向後一層の努力を傾注しなければならない」と組合員に呼びかけている。同紙は、前述したシュワープが、天皇に「巡幸は必ずや労資双方の緊密な協力をもたらすと信じます」と語った事実も報じている。また、三池炭鉱職員組合の機関紙『組合旬報』7号（1949年6月5日）も、「天皇裕仁氏を咫尺に相まみえたものゝ齊しく感ずることは弱々しさ、しかしその中から溢れる「平和」「慈愛」といつたものであつた。……（中略）……「平和の象徴」としての天皇にご健康をいのる」と、やや冷静に巡幸を迎えた感激を伝えている。

また、三池炭鉱労働組合三川支部でも、天皇の巡幸を前にして機関紙『すみのひびき』13号（1949年5月18日）で「天皇の九州巡幸に対して三川鉱に入鉱されるのでその準備の為には莫大な財を投資しようとする心算であるとか、日本の総人口中に労働者階級の占める%は絶対であるがその労働者が苦しい毎日を過してゐる有様では我々の象徴である天皇は決してたとへ会社側が巨万の富で奉迎しても心は安らかではないと思ふ 我々が楽しくその日その日の生業にいそしむ事こそ天皇の最も喜ばれる事であり資本家の金力による歓迎より真心溢れる奉迎こそ希まれる事であると思ふ」と、実質賃金切り下げなど労働者の生活を悪化させている会社側を批判するものの、それは天皇巡幸を歓迎するという立場からのものであつた。したがって、『すみのひびき』14号（1949年5月25日）では、「天皇陛下万歳 私達は真実の姿で心からなる奉迎を致しませう」と組合員に呼びかけ、「三川鉱の内外が日の丸で埋め尽くされる光景」に思いを馳せていた。

さらに、三池炭鉱労働組合製作支部では、『三作支部だより』27号（1949年6月14日）に「日の丸と赤旗」と題する主張を掲載、次のように、民族意識、国家意識と社会主義との一致を求めていた。

今まで赤旗ばかり振つていた組合が、天皇が大牟田に来られたからといつて急に日の丸の旗を何千本も売り飛ばした事は面白い現象である。勿論□□□闘争カンパであつたであろうけれども、良く考えて見れば当然の事である。如何に主義主張が異なつ

たにしろ自分達の国を良く成して行こうと言う心は誰でももっている筈である。赤旗と日の丸が妙な対照として話題に上つたようだけれども苦々労働者が「民族の独立」をさげび、「労働者の力により豊かな日本を建設する」大きなスローガンを各人口々が持っている事からしても何等おかしな所はない筈である。日の丸の旗は、日本の旗であり民族独立の旗である。そして赤旗は日本国内に大きな集団をなしている、吾々労働者の旗である。天皇が来られたから急に日の丸の旗を振り挙げたと云う非難もあるが、吾々としては天皇を迎える事そのものよりも、むしろ忘れられていた、民族意識、国家意識を昂揚する事に意義があることを知らなければならない。日の丸によつて思い出された様に天皇制度、支持か反対かと云う事について論議が各職場に起つたようだが、今更、反対、支持を「ヤツキ」になつてやる必要もあるまい。吾々は労働者の力によつて日本を社会主義化して民主的なそして豊かな国にしていく事が一番重要な事である。

日の丸と赤旗は共存し得るという主張に象徴されるように、三池炭鉱においても、天皇は見事に石炭増産奨励と労資協調奨励の役割を果たしていた。5月31日付『朝日新聞』筑豊版は「天皇と石炭—巡幸を顧みて」と題する記事を掲載し、同様に次のように報道した。

田川でも杵島でも休日を振り替えて全鉱員、家族総出でお迎えし最小限の保安要員だけが入坑していたが「保安はおれが引受けた、お前陛下にお会いしてこい」と代つてやったり昨日までストで赤旗をふった労働大衆も人間としての陛下を心から迎えるものが多かった……（中略）……（天皇は）三井田川鉱では鉱員たちに「石炭は大切な基本産業の一つだからしっかりやって下さい」と日本復興を言外に強く激励されている……（中略）……側近の者にまで石炭は大切だ、時には危険を伴う作業であると炭鉱労働者の苦勞を漏らされる程である。これは鈴木行幸主務官の話である。

6月10日、九州巡幸の最後の宿泊地となった八幡市で天皇は巡幸の感想を述べ、「九州の各種天然資源は日本国の再建のために非常に重要な役割を担うものである、九州人はよくこれらの資源を活用し、今後も幾多の困難を克服して、なお一層努力されんことを希望し、期待する」と語った（『西日本新聞』1949年6月11日）。

九州巡幸を終えたとき、総理庁は、巡幸が「経済九原則下の生産復興を激励されることに重点が置かれ、石炭をはじめ数々の重要産業、殊に輸出濃厚の工場で働く人達を励まされ深い感動を与えられたことは大きな特色」と評価し、「国民も安らかな気持ちで国民統合の象徴としての陛下に親しみ、得難い陛下との接触を楽しむことが出来た」ので「左右両翼の動きはいづれも目ぼしいものが無」かったと総括した。⁽⁵⁶⁾ 天皇は課された政治的役

割を十分に演じきったのである。

おわりに

九州巡幸時、炭鉱の不況が進行し、すでに1949年6月末で全国の貯炭量は268万トンに達していた。⁽⁵⁷⁾「大勢として減産傾向に向うことは必至」という状況にあった。⁽⁵⁸⁾しかし、そのなかで天皇は不況以前の認識、傾斜生産方式当時の認識のまま、労資双方に石炭増産を求めた。したがって、天皇の巡幸後も、炭鉱労働者の置かれた厳しい現実には改善されることはなかった。福岡石炭局の6月末の統計では、九州の炭鉱の黒字化が進み、1949年中に7割の炭鉱が自立できるとの見通しを示すが、その背景には合理化があり、一日平均で100名の炭鉱労働者が退職=失業していたのである（『長崎民友新聞』炭鉱版、1949年7月18日）。筑豊では、「井華忠隈坑で不良鉱員ら三十四名の整理を発表してセンセーションを巻き起していたところ嘉穂郡幸袋町加茂炭鉱でも経営合理化のため停年 病弱者、出勤不良の職員鉱員など六十五名の大量解雇をすべく去る四日一ヶ月前の解雇通知を行つた、……（中略）……鞍手地区演習炭坑、原口本洞をはじめ田川地協の各中小坑山とも不良鉱員の整理名目で人員整理が計画されている」という状況が続いていく（『筑豊タイムス』1949年6月13日）。

1950年、朝鮮戦争勃発直前、この後、炭鉱の合理化路線を推進する役を演じることになる東京大学経済学部教授の有澤廣巳は三池炭鉱を訪れ、「石炭はどんどん掘っているけれども、グラウンドいっぱい石炭を積み上げている」光景に直面し、「石炭が売れないんだ。つまりデフレで石炭の需要は減っている」ことを実感している。⁽⁵⁹⁾九州巡幸時、炭鉱をめぐる状況の変化に対応せず、傾斜生産方式のときと同じ認識により石炭の増産を求めた天皇は、こうした状況の現出にも一役買ったことになる。結果、国民統合の象徴となった天皇がもたらした政治的効果は、炭鉱労働者を労資協調に向かわせたことのみであった。

その後、炭鉱の不況は朝鮮特需で一時回復したものの、戦争が終結すると、再び、状況は悪化した。そして、炭鉱不況がいよいよ深刻化していた1954年8月10日、天皇は皇后良子を伴い北海道を巡幸啓し、その際、北海道炭礦汽船夕張鉱業所を訪れている。北海道巡幸は17日間に及び、しかも、北海道には北九州同様、多くの炭鉱が存在するにもかかわらず、訪れた炭鉱は夕張のみであった。

この年、炭鉱不況はより深刻化し、さらに石炭より安価で需給も安定している石油への信用が高まり、国策も石炭から石油へのエネルギー転換に向かっていた。こうしたなかで、炭鉱経営者側が求めたのは徹底した合理化であり、1955年9月には、中小の非効率炭鉱を買収して閉山させ、大手の高効率炭鉱に生産を集中して窮地を乗り切ろうとする石炭鉱

業合理化臨時措置法が成立する。こうした炭鉱の合理化は、「スクラップ・アンド・ビルド」と言われたように、当然ながら買収、閉山させられた中小炭鉱に膨大な失業者を生み出していく。石炭産業は「重要産業」「基盤産業」という地位をわずか数年にして国策により奪われ、「斜陽産業」と呼称されるようになる。1954年の北海道巡幸はこうした状況下になされた。天皇が炭鉱を訪れる意義は1949年の九州巡幸時と比べるとはるかに軽くなっていた。

この日、天皇は午後2時10分に夕張炭業所に到着し、2時40分に同所を出発したので、滞在時間は30分であった。⁽⁶⁰⁾ 選ばれて整列して出迎えた60名の労働者の代表に対し、「長年石炭企業につくした功労を賞讃します。石炭企業は重要でありますから、若いものをよく指導して今後とも努力してほしいと思います」と激励した。これまでの炭鉱巡幸の際の常套句であった「石炭の増産」「組合の健全な発達」という発言は新聞記事からは読み取れない。夕張炭鉱は「戦後は左翼陣営の牙城となり、山には赤旗が翻つたが、最近は過激な労働運動も消えて、行幸啓をお迎えしての奉迎ぶりは至つて盛んなものであつた」という。⁽⁶¹⁾ 「道内で心配されるところは夕張というウワサだつたが、市民の歓迎ぶりはこれを完全に打消し」（『北海道新聞』1954年8月11日）、「夕張はこん度のご視察地の中でも一番不安な箇所と云う噂もあつて警衛陣を緊張させたが、事實は是に反し全く平和裡に真心こめでの歓迎振りだつたのでむしろ警衛員が拍子抜けしたという格好」に終わった。⁽⁶²⁾ 天皇の炭鉱巡幸は、この夕張で完結した。夕張への巡幸は、国策により「斜陽産業」に転落させられた炭鉱の現実を如実に示すものであった。

付記 小稿作成に当たっては、史料調査で以下の機関を利用させていただいた。厚く御礼申し上げます。

飯塚市立図書館 大町町公民館（佐賀県杵島郡）大牟田市立図書館 宮内庁宮内公文書館 慶應義塾大学三田メディアセンター 国立国会図書館 新聞ライブラリー 石炭産業科学館（大牟田市）石炭博物館（夕張市）田川市立図書館 田川市石炭・歴史博物館 長崎県立長崎図書館 直方市石炭記念館 直方市立図書館 福岡県立図書館 福岡市総合図書館 福島県立図書館 北海道立図書館北方資料室

註

- (1) ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』増補版下巻（岩波書店、2004年）、76～77頁。
- (2) ここで戦後の天皇の全国巡幸についての研究史を概観しておこう。すでに、天皇の全国巡幸については、その過程にあった1953年、清水幾太郎が、天皇制の保存を求める日本と、「軍国主義の最高の指導者であった人物を、その徹底的批判を禁じたまま、ズルズルベツタリ、民主主義の最高の指導者たらしめようと決意した」アメリカの、両国支配者が思いついたものであると指摘していたし（清水幾太郎「占領下の天皇」、『思想』348号、1953年6月、10頁）、同年、服部之總も「権力の危機にさいして行幸が演出された」と簡潔な評価を下していた（服部之總「政治的空白」、小掠広勝編『日本資本主義講座』2巻、岩波書店、1953年、328頁）。天皇の戦争責任を不問に付し「国民統合の象徴」として天皇制を維持したい日本側と、占領政策の円滑な遂行に天皇を活用したいアメリカ側の合意の下で天皇の巡幸が演出されたということを清水と服部はいち早く指摘していた。そして、以後の研究においても、基本的にこの指摘が継承されていく。

歴史学の立場からの研究が開始されるのは、巡幸が終了してから21年を経た1975年のことであり、その口火を切ったのは鈴木しづ子である。そこで、鈴木は、巡幸とは「人間宣言」の実行に止まらず、巡幸先での天皇の「労組幹部への激励」が慣例となり、「労資協調的ムード作り」に、天皇が一役買っていたとみることは決して不可能なことではない」という重要な指摘をおこなった（鈴木しづ子「天皇行幸と象徴天皇制の確立」、『歴史評論』298号、1975年2月、59頁、64～65頁）。しかし、その後しばらく、天皇の全国巡幸に焦点を絞った研究はなされなかった。

状況が変化したのは1989年1月の昭和天皇の死去が契機であった。天皇への追憶、あるいは天皇の時代への検証とその動機はさまざまであるが、天皇の巡幸に関する研究が相次いで発表されるようになる。また、天皇側近の日記をはじめ基本的な史料が相次いで公刊され、天皇が演じた象徴天皇の役割を歴史的に考察しようという志を多くの研究者が共有することが容易になった。たとえば、坂本孝治郎は、天皇の巡幸を象徴天皇制の「社会的批准式」と比喩し、「象徴天皇制へのパフォーマンス」の一環と位置付けたが、坂本のこうした比喩的な表現は、端的に天皇の全国巡幸の本質を示したものと言えよう（坂本孝治郎『象徴天皇制へのパフォーマンス—昭和期の天皇行幸の変遷—』、山川出版社、1989年、「まえがき」iii頁）。

次に、戦後初期の雑誌・新聞記事を軸に民衆のなかの戦争責任論を分析した吉見義明は「過半数の民衆にとって、天皇制を廃止することも、天皇の戦争責任を追及し退位を要求することも、思いもよらないことだった。それは、一九四六年二月一九日から始まった天皇の全国巡幸で確認されることになった」と述べ、その事例として天皇が訪れた山口県沖ノ山、福岡県田川、長崎県潜龍の各炭鉱の労働者が天皇の炭鉱巡幸に感激して増炭に励む姿を紹介し、「天皇を神として奉迎し崇める民衆が少なくない中で、若々しく、純真で、女性的な語り口をもち、かつ国民と共に苦勞している「人間天皇」「民主天皇」というイメージが定着して行き、多くの人々は天皇とともに増産・復興に励もうとしはじめていた。このような中で、天皇の戦争責任も退位論もうやむやになって行った」と結論付けた（吉見義明「占領期日本の民衆意識—戦争責任論をめぐる—」、『思想』811号、1992年1月、94～99頁）。

また、升味準之輔は、巡幸に熱狂する群衆の姿を背景に、講和後に公職追放が解け政界復帰した政治家たちが憲法改正運動を促進させたことをあげ、天皇巡幸の持つ政治的影響力の大きさを指摘（升味準之輔『昭和天皇とその時代』、山川出版社、1998年、302頁）、原武史は、天皇の巡幸を迎え熱狂する国民の姿に「昭和天皇との一体感」を実際に味わった事実を認め、近代天皇制を継承した象徴天皇制は「イデオロギーとは別の支配」、すなわち「視覚的支配」も継承したと論じ（原武史『可視化された帝国—近代日本の行幸啓—』、みすず書房、2001

年、381～382頁)、吉見俊哉も、「通説的に言うならば、この地方巡幸は、超越的な身体としての天皇から全国民がまなざされていく戦前までの天皇制儀礼とは異なり、「人間天皇」を国民と等身大のレベルまで降下させる新たなパフォーマンス戦略であった」ことを認めつつ、「巡幸先での住民の歓迎方式や人々の奉迎、新聞報道を具体的に検討するならば、実際にはこの地方巡幸は、戦前との断絶よりも連続をはるかに強く示していた」ことを指摘した(吉見俊哉「メディアとしての天皇制—占領から高度成長へ—」、『岩波講座 天皇と王権を考える』10巻、2002年、188～189頁)。さらに、全国巡幸の先例となった1945年11月の伊勢神宮への天皇の「終戦奉告行幸」を分析した瀬畑源は、このときから宮内省は「天皇の身体を国民の前にさらす方向へと政策を転換し」、以後の巡幸において「天皇は特に戦災者や引揚者、戦争未亡人などの関連施設を重点的に訪問して、その「仁慈」を振りまいた」と指摘した(瀬畑源「昭和天皇『戦後巡幸』の再検討—一九四五年十一月『終戦奉告行幸』を中心として—」、『日本史研究』573号、2010年5月、44頁)。そして、こうした先行研究を基本に、巡幸を推進した宮内大臣・侍従長ら天皇側近の動向に注目した舟橋正良は、「戦後巡幸の目的には国民を励ます目的のほか、天皇の側近たちによって画策された「国体護持」運動の重要な一側面を有していた」こと、天皇(制)を維持させるため、そして象徴天皇制を確立させる政治的イベントとしての側面を巡幸は強く持っていた」ことを認め、「人間宣言」、日本国憲法発布と並行して実行された巡幸は、天皇と宮中側近とによる「天皇(制)を維持するための運動であると共に、象徴天皇制の形成と定着に向けた政策」であったことを強調した。船橋の結論は先行研究の主張の要約という域を出るものではないが、天皇の全国巡幸に対する研究の共通認識を提示している(舟橋正良「昭和天皇の『戦後巡幸』と宮中側近の動向—一九四五年から一九四八年を中心として—」、『立教史学』2号、2010年12月、41頁、49頁)。

一方、近年、昭和天皇の評伝も多く刊行されているが、そうした評伝においても、戦後の全国巡幸について言及されている。原武史は「東京で革命の恐怖におびえていた天皇は、地方を回るたびに自信を回復していった」と述べ(原武史『昭和天皇』、岩波新書、2008年、166頁)、古川隆久は「巡幸は昭和天皇の在位の必要性を占領軍と国民に認識させたという意義があった」と評価(古川隆久『昭和天皇—「理性の君主」の孤独』、中公新書、2011年、344頁)、さらに伊藤之雄も、当初、天皇は「立憲君主としての自覚から、地方巡幸に強い意欲を見せた」が、1946年3月に政府の「憲法改正草案要綱」が公表されると「巡幸の目的は、象徴天皇として、国民精神を指導することに変わった」こと、あるいは巡幸が「間接的に、吉田首相と連携する形で、多数派講和への土壌を育成した」ことを指摘しているように(伊藤之雄『昭和天皇伝』、文藝春秋、2011年、434～434頁、462頁)、天皇の全国巡幸は、日米政府との合意の下で、象徴天皇制として護持された「国体」の姿を国民に示す演出であったことが示唆されている。

- (3) 鈴木しづ子の主張については註(2)を参照。
- (4) 吉見義明の主張については註(2)を参照。
- (5) 瀬畑源「昭和天皇『戦後巡幸』における天皇報道の論理」(『同時代史研究』3号、2010年)。
- (6) 「天皇陛下御巡幸と本県産業を語る本社記者座談会」(佐賀新聞出版部『産業佐賀』4巻4号、1949年6月)、39頁。皇后に関する事例であるが、1946年2月22日、皇后良子が済生会病院や戦災孤児の収容施設双葉園などを訪れた際、侍従長木下道雄は「済生会病院にても、双葉園にても内外の写真班側近に入り乱れ、乱写す」という事態に直面し、外国人のみならず「邦人写真班がこれに劣らじと騒ぐは見苦しき限りなり」と日記に記し、カメラマンたちが皇后の周囲に群がり撮影を続けたことに苦言を呈している(木下道雄『側近日誌』、文藝春秋、1990年、154～155頁)。
- (7) 同上書、114～116頁。
- (8) 同上書、155頁。

- (9) 同上書、181頁。
- (10) 傾斜生産方式の立案過程については宮崎正康「解題」(中村隆英・宮崎正康編『資料・戦後日本の経済政策構想』2巻、東京大学出版会、1990年)を参照。
- (11) [第三回天皇・マッカーサー元帥会議記録](山極晃・中村正則編『資料日本占領』1巻、大月書店、1990年)、572～573頁。
- (12) 「炭礦従業者に対する吉田総理声明」(中村隆英・宮崎正康前掲編書、92頁)。この声明を作成したのは外務省調査局の大来佐武郎と推定されている。
- (13) 宮崎正康前掲論文、23～24頁。吉田茂は回想のなかで、「わが国の勤労階級の大部分が真面目であり、勤勉であることは、今や世界的に有名だといってよい。すなわち指導者のうちの少数者が私のいう「不逞の輩」なのである」と弁明しているが、その一方で、炭鉱の労働争議について「家族ぐるみ闘争」などと称し、無邪気なる女房、子供まで渦中に巻き込み、争議が長期に亘って、これらの家族がその日の糧にも窮しつゝあるのも看過し、しかも争議が終末に近づくともみよ、*「あとは野となれ山となれ」*式に去ってしまう非情、冷酷なアジテーターは、如何にも軍隊づれした下士官を想起させるではないか」と、憎悪を露わにしている(吉田茂『回想十年』2巻、新潮社、1957年、254頁)。
- (14) 高橋紘『陛下、お尋ね申し上げます―記者会見全記録と人間天皇の軌跡―』(文春文庫、1988年)、41頁。
- (15) 「万が一」というのは炭鉱事故を指すと考えられるが、それだけではなく、炭鉱の労働運動における共産党の影響力への憂慮も含むのではないだろうか。1945年10月30日、侍従の入江相政は、「常磐炭田で坑夫の罷業に共産党員が乗り込み演説会を開いた。天皇制の廃止を叫んだら演説会を中止させると言ふのに弁士は皆それを云つたのでアメリカの中佐が演説会を中止せしめたとの事」という新聞記事を日記に記している(『入江相政日記』2巻、朝日新聞社、1990年、16頁)。
- (16) 前掲『入江相政日記』2巻、147頁。
- (17) 1947年9月4日付内務省警保局公安第一課長・宮内府総務課長・各府県警察部長・警察部各課(室所)長・県下各警察署長宛て福島県警察部長「警衛実施状況について」(昭和二十二年幸啓録)24―宮内庁宮内公文書館所蔵一)。
- (18) 福島県編刊『御巡幸録』(1947年)、10頁、12頁、65頁。
- (19) 上野英信は、過酷な労働と圧制と搾取のなかで、炭鉱労働者自身が自らを「下罪人」「亡者」と自嘲していたことを指摘している(上野英信『追われゆく坑夫たち』、岩波新書、1960年、78～79頁)。
- (20) 「巻頭言」(潜龍労働組合『潜龍』3号、1948年1月)、1頁。
- (21) 坂本孝治郎前掲書、187頁。
- (22) 1948年5月30日、天皇は三千万吨突破優良炭鉱及び従業員表彰式に出席した15名の労働者を皇居に招き、「みならの努力で石炭がたくさん出るようになったのはうれしい。なお今後も力を増産に注いで欲しい」と声をかけた(「天皇陛下 炭鉱人にお言葉」、西部石炭協会『旬報』4号、1948年6月、1頁)。
- (23) 高橋紘前掲書、53頁。
- (24) 山口県警衛本部「御日程及巡幸箇所状況並に警察署管内治安状況表」、1947年12月(「昭和二十二年幸啓録」43―宮内庁宮内公文書館所蔵一)。
- (25) 山口県知事公室編刊『天皇陛下山口県行幸録』(1948年)、38～39頁。
- (26) 「陛下問の感激を語る」(沖ノ山炭鉱々業所鉱友会『沖ノ山』2号、1948年3月)、17頁。
- (27) 中川左近「天皇巡幸についての報告」(“Emperor’s Tours” Des.1947-Nov.1951、「日本占領関係資料」GS (B)-01787―国立国会図書館憲政資料室所蔵一)。
- (28) こうした事実は炭鉱のみではなかった。天皇が巡幸した各地の工場でも同様の効果が確認され、

巡幸に同行した侍従入江相政の日記にはそうした叙述が散見される。1947年6月5日、天皇は関西巡幸で訪れた大阪市の住友電気工業で労働組合幹部に対し「組合の健全なる発達を望む」と語っている。続いて訪れた武田薬品工業では、侍従の入江相政は「左翼の活動の激しい所」であると心配していたが、天皇に対し「不敬なことをする者もなく、全く無事であつた」と安堵している。入江は事前に、生活の窮状を訴えて、天皇が「何も仰せられないやうにする」という情報を得ていたのだが、結局、「そんなことは一つも無かつた」。また、6月11日には神戸市の川崎車両を訪れるが、ここも「思想的に面倒な所と聞いてみたが、行幸を上げば何の事も無い、皆難有ががつてみた」と入江は日記に記している（同上書、139頁、142頁）。あるいは、同年9月6日、関東巡幸で日光を訪れた際、古河電気工業日光電気精銅所では、労働組合長に「御言葉を賜はつた時」、組合長から「全国労働者の為に握手をしていただきたい」と求められ、天皇は「日本再建の為しつかりやつて下さい」と答えるにとどめ、「さつきの握手のことは日本式で行きませう」とかわしている。天皇は労働組合に日本再建のために奮闘することを求め、労働組合は、天皇に労働者への激励を求めている（同上書、162頁）。さらに、同年10月28日、北陸巡幸の途次、天皇は石川県和倉にあるイソライト工業を訪れた際、この工場の労働組合は共産党系の産別会議に所属していたのだが、入江は、この日の日記に「行幸を仰ぐといふことになつてから組合は産別を脱退した由」と記し、さらに金沢から和倉までの汽車の機関士も共産党員であったが、「その人が精進潔斎、一心に事に当り、それについて不明をとなく若い者をたしなめて一生懸命に事に当つた」とも記し、この二つの事実は「特筆すべきこと」と力説している（同上書、176～177頁）。

- (29) 「天皇陛下の九州地方御巡幸について」（『昭和二十三年総理府公文』巻31、「総理府公文」2 A-029-04—国立公文書館所蔵—）。
- (30) 島西智輝『日本石炭産業の戦後史—市場構造変化と企業行動—』（慶應義塾大学出版会、2011年）、69頁。
- (31) 「石炭鉱業に於ける賃銀遅配の実情」（『労働時報』1049号、1949年5月）、19頁、25～26頁。
- (32) 『石炭労働年鑑』1949年版（日本石炭鉱業聯盟、1949年）、58頁。
- (33) 炭労四十年史編纂委員会編『炭労四十年史』（日本炭鉱労働組合、1991年）、205～207頁。
- (34) 島西智輝前掲書、85頁。
- (35) 「天皇陛下地方状況御視察の為九州各県下へ行幸御日程の件」（『昭和二十四年総理府公文』巻6、「総理府公文」2 A-029-4—国立公文書館所蔵—）。
- (36) 増田春雄「地域的勝利の前進—筑豊地方の人民闘争について—」（『前衛』38号、1949年5月）、20～21頁。
- (37) 福岡県知事室秘書課編『天皇陛下行幸録』（1952年）、19頁。
- (38) 「九州巡幸を繞る関係各方面の動向について」第1報（『昭和二十四年幸啓録』13—宮内庁宮内公文書館所蔵—）。
- (39) 「九州行幸楽屋ばなし」（『週刊朝日』1949年6月26日号）、8頁。
- (40) 前掲『入江相政日記』2巻、317頁。
- (41) 廣田昭元「天皇陛下をお迎えして」（『地光会通信』天皇陛下行幸記念特別号、1949年6月）、4～5頁。
- (42) 三井田川鉱業所「陛下御巡幸室内御説明書」、1947年5月20日（『昭和二十四年幸啓録』17—宮内庁宮内公文書館所蔵—）。
- (43) 尾形権三郎「天皇奉迎」（古河目尾鉱業所『目尾』21号、1949年6月）、1頁。
- (44) 福岡県知事室秘書課編刊『天皇陛下行幸録』（1952年）、21頁。
- (45) 「九州警衛情報」1949年5月22日（前掲「昭和二十四年幸啓録」13）。
- (46) 佐賀県編刊『佐賀県御巡幸誌』（1949年）、67頁。
- (47) 山本喜一「天皇を迎へ奉りて」（小城炭鉱労働組合『ぶんか おぎ』6号、1949年）、26頁。

- (48) ただ、杵島砒業所での滞在時間は10分に過ぎず、「会社の重役、部課長、係主任といったような席を設けて真に増産に挺身している勤労大衆は比較的遠い場所からお目にかかるに過ぎないようであつた」ため、『佐賀新聞』の記者は「封建的なしこりがあるようで好感が持てなかつた」と批判している（前掲「天皇陛下御巡幸と本県産業を語る本社記者座談会」、34～35頁）。
- (49) 「九州警衛情報」1949年5月23日（前掲「昭和二十四年幸啓録」13）。
- (50) 前掲『入江相政日記』2巻、319頁。
- (51) N. R. P本部警備課「御巡幸だより」第7報、1949年5月25日（「昭和二十四年幸啓録」16—宮内庁宮内公文書館所蔵—）。
- (52) 前掲『入江相政日記』2巻、322頁。
- (53) 阿具根登『回想録 道をもとめて』（阿具根登回想録出版委員会、1981年）、242頁。
- (54) 「天皇海底下採掘の三川砒に御入坑」（北海道炭鉱文化研究所『炭鉱』8月号、1949年8月）、2頁。
- (55) 福岡県知事室秘書課編前掲書、52頁。1953年から日本社会党参議院議員となり国政に進出する阿具根にとり、このときの感激は生涯忘れられない体験となり、晩年においても、このとき、天皇との対話を誇らしげに回想している（阿久根登前掲書、240～243頁）。
- (56) 「総理庁よりのインフオメーション^{ママ}原稿」（「昭和二十四年幸啓録」8—宮内庁宮内公文書館所蔵—）。この文書は6月18日付で宮内府より第3次吉田茂内閣に回付されている。
- (57) 「中小炭鉱の今後の動向」（『労働週報』12巻461号、1949年8月6日）、3頁。
- (58) 「中小炭鉱の危機深まる」（『政経情勢月報』10号、1949年10月）、20頁。
- (59) 有澤廣巳『戦後経済を語る』（東京大学出版会、1989年）、40頁。
- (60) 北海道編『北海道行幸啓概要』1輯（1954年8月）、122頁。
- (61) 札幌市役所編刊『北海道行幸啓誌』（1955年）、170頁。
- (62) 北海道総務部文書統計課編『昭和二十九年北海道行幸啓誌』（北海道、1957年）、140頁。